

国士舘大学体育研究所設立40周年を祝いつつ・・・

Celebrating the 40th anniversary of the founding of Kokushikan University's Institute of Physical Education

山本 徳郎

Tokuro YAMAMOTO

私が国士舘大学に着任したのは2000年4月だったが、その前年に剣道部事件があり、「非暴力宣言」が出されていた。この「宣言」を出さねばならなかった事情は理解するものの、これは下手すると「非人間宣言」に通ずるのではないかと感じ、その理由を講義等で学生にも話していた。そして後日「非暴力宣言＝非人間宣言!？」と題して『国士舘大学体育・スポーツ科学研究』（第6号、2006年3月）に寄稿した。

2002年度から体育研究所長となったが、翌年から日本体育学会の会長にも選出され、法人化問題と重なって多忙だった。所長としての最初の仕事は、2002年11月28日に行った研究所研究会の立案・実施だった。私の記録によると、この研究会は『『体育研究所報』第20号発刊記念』とされていた。したがって、当日の発表者は第20号に論文が掲載されていた3人の方をお願いした。それは発足したばかりの大学院が三つのコースから成っていたので、それぞれのコースから竹中敏文、滝山将剛、時本誠資の三先生が選ばれた。

もう一つ忘れられない研究所の活動は、2003年5月22日に行われたシンポジウムのことだった。当日は理事長の西原春夫先生、柔道の故齋藤仁先生をシンポジストをお願いして、試合後の「ガッツポーズ」について話し合っていた。西原先生は

2000年9月に『人を生かし、国を活かす—いま国士舘のめざすもの—』を出版されたが、その中では勿論それ以後も機会あるごとに、剣道と柔道におけるガッツポーズの有無を問題にされ、武道とスポーツについて書いたり話したりされていた。私はこのご発言に接するたびに、これは体育学部へ的一种の問題提起ではないかと感じていた。運営委員会に諮り、了承を得たので実現することができた。

国士舘に着任早々私を刺激したものに「21世紀アジア学部」があった。最初は聞きなれない名称に違和感を覚えたが、その経緯を見聞きするうちに、これまでにない新しい「アジア学」への創造が目指されていることを知り、納得すると同時にこれからの国士舘に吹き込まれる新風を感じた。当時私は20世紀の悪弊をひきずっている体育・スポーツの状況にも新鮮さを呼び込みたいと考え、新しい名称を思案していた。大方は「体育からスポーツへ」と考えられていたが、私は21世紀アジア学部にあやかって、仮の名称を「21世紀オリピズム」とし、「体育研究所」と科研費へ研究費の申請をした。その研究成果を「21世紀オリピズム構築のための基礎的研究」として所報第22巻と第23巻に2回報告した。これは未解決の課題として、現在にも引きずっている私の貴重な思い出である。